

2 恐慌からの脱出策

恐慌期の 販売事情 まず恐慌期の販売事情をみておこう。不況による売薬業界の打撃の一端はすでに述べたが、その影響は売薬の関連分野にも及んだといわねばならない。たとえば、「売薬の産額から面白い統計」と

題して、地元紙は売薬を包んでいる薬包紙および配置用の大袋の印刷枚数がぼう大な数になっている事実を指摘し、もしそれらの印刷が中止されると印刷業者が直に破産のうき目をみると展望している（『奈良新聞』、昭和四年三月一八日付）。いく分誇張があり、また別の視角からも論じる事柄であるが、一笑に付すことはできないだろう。

つぎに売薬業界の苦境を報じた二つの新聞記事を掲げることにする。生々しい実態を伝えているから、長文をいわずそのまま引用しておこう。一九二八年（昭和三）二月一八日付の『奈良新聞』は、不景気のため代金回収などが思うにまかせない状況を、こう報じている。

大和売薬の配置行商は旧年末の総勘定を前にして、どの業者も多数の売子を各府県に出し資金の回収につとめているが、打続く不況が祟って成績頗るふるはぬ模様で薬品仕入れの為に帰県中の売子の話を総合すると、

市街地は医師や薬剤師の増加にともなひ売薬は自然淘汰を喰って追詰められ、殊に医家の売薬類似営業が現れて全く駄目となり、一方田舎方面や交通不便な漁村山中などでは相当消化されているが、事業不振から地方民の懐中はめっきり疲弊し、甚だし

い地方は回収不能に陥り一般に値切れが多い、
とこぼしているが、この愚痴も満更嘘とは思はれぬ節もある事として本県売薬の年末も世の不況に災され、同様の面白からぬ結果を展開するものと見られている。

一九三〇年（昭和五）一〇月五日付の『奈良新聞』は、「藪圃安に米価惨落と次々に起る不況の深刻化」、つまり不況の嵐のなかで大和売薬の売れ行きが激減したことを伝えるとともに、集金の成績が上らぬようす、さらに配置先の状況などを具体的ににつきのよう報じている。

本年の産額は昨年より四百万円を減じた二千百万円（定価額—引用者）見当と予想される、売子の数も約一万人は年中旅から旅への売薬売りを続けているが、昨今は集金意の如くならず、旅に居て旅籠賃も捻出できない苦しい破目に陥り、残った集金を棄て、迎々の態たらくで大和に戻る者が続出する有様である、殊に集金の悪い所は信州方面の藪圃を本場とする所で平年の約三分の一しか集金が出来ない惨状で、さすがの売薬王国も今や非常なるピンチに襲はれている形である、たゞ北海道のみは不況の影響が薄いためか集金が平年並で割合好成绩を示しているため、同方面に新販路を開かうとする傾向があるが、余り一ヶ所に販路開拓に集中されるときは共倒れとなるため前途を憂慮する向きが多い

この時期には、類似商標で争いが起きているし（『奈良新聞』、昭和三、年一〇月二〇日付）、また香川県の小学校の修学旅行の宿泊所をめぐるトラブルから、思わぬ飛ばつちりを受け、同県内では大和売薬不買同盟が組織される一齣もあった。香川県内を営業区域としている数十人の売薬行商人は困惑し、同業組合に助けを求めた（『奈良新聞』、昭和、四年六月二七日付）。

さらに、九州産の延膏薬（俗に「按摩」いらす）を大和売薬として配置行商している問題があったようで、県内の七人の延膏薬製造業者が、組合幹部に対し、「今後組合に九州の延膏薬搬入を廃せられたい、万一これが実行されず尚我々延膏薬製造業者のみに対して別物扱ひされるとせば、大和売薬の内容を天下に公開して闘ふとの強硬な態度」（『奈良新聞』、昭和、四年九月一三日付）に出る一幕も起きた。県内の延膏薬の生産高も相当な額に達していたが、品質粗悪であるとの理由で、毎年二〇万枚の九州産を搬入していたらしい。

大和売薬の販売をめぐる問題は、そのほか割り引き乱売の弊などがあったが、さきに内務省令をもって改正された売薬法施行規則についてみると、一九三一年（昭和六）に入っても商号・氏名の欠落が相変わらず多かつたという。

また営業者、請け売り業者中、改正規則による未手続き者が相当数にのぼつたらしく、その徹底には時間を要した

（『奈良新聞』、昭和六年一月一八日付）。

配置員の養成と 業者の政界進出

本県は製剤業者のうち薬剤師が少なかったから、いっそうの発展のために薬剤師の養成が急務であるとして、大正末年には、奈良県会に薬学専門学校の設立が建議されたことがある。財政上の問題から県立薬学専門学校は実現をみなかった（『奈良県政七十年』、史、五五八頁）。県内薬剤師の払底からの動きであったが、他方営業の基礎となる配置薬販売員の指導・養成も大きな課題とされ、さきの売薬行商人大会で要望決議された売薬商業学校設立の件は、一九三〇年（昭和五）四月開校の運びとなった。もともと大和売薬同業組合の有志が発起人となり、その浄財をもって畝傍町見瀬（現樋）に私立奈良県薬学校として設立されたのである。修学年限は二年、配置薬販売員の養成を主眼としたものであった。この点は、後述する。

第三回売薬短期講習会（一九三〇年九月一日から四日間）は、右の奈良県薬学校で開催された。受講者一九六人、修了者一三六人であった。講習科目と講師陣は、つぎのとおりである（前掲『昭和五年度』）。

「薬物と性効」売薬検査官地方技師森正五郎、「同上（和漢薬）」薬品巡視官衛生技師玉木秀雄、「一般生理衛生」奈良県薬学校講師森里晋七、「商業道徳」奈良県嘱託講師布施弘憲、「販売に関する綱領」同仁薬業株式会社支配人米田正巳、「売薬監督者の立場より売薬行商人に告ぐ」県衛生課長河合団次郎、「日本売薬の変遷と売薬販売員諸氏に希望」奈良県薬学校校長中尾源治郎、「法医の用ふる病名に就て」工業試験場売薬部主任後藤謹二、「最新薬品の二、三に就て」奈良県薬学校講師松島郁夫、「紳士学としての商業

学」同上永峰岩次、「大和売薬行商人の使命」大和売薬同業組合副組長奥村正信

なおこれに先立つ、第二回売薬短期講習会は受講者二二三人、修了者一六六人であった(前掲「昭和四年度」(業務成績報告書))。またこの前後、売薬研究講演会も開かれた。テーマおよび講師陣は、右の講習会の場合とほぼ同じである。大和売薬の製剤向上に資するところ大であったという。

ところで、当時、大和売薬業の発展を期するため、同業者から地方議会への進出が提唱され、一九三一年には、松原利左衛門(磯城郡)、奥村正信(高市郡)、仲川房次郎(吉野郡)の三人の県会議員を誕生させたことが注目される。後に再びふれるように、彼らは、奈良県薬学校への補助金下付に努力を続けたし、さらに「私立奈良県薬学校を県営に移管し、是を奈良県実業学校にされたし」との建議を行っている。そのほか、前述の売薬配置税の撤廃問題など、県内の重要産業である大和売薬業振興について、県会で活発な活動を展開したのである。三議員とも、民政党に属していた。

売薬業者の地方議会への進出といえば、一九二九年春南北両葛城郡、磯城郡、高市郡内の町村会議員改選にあたり、大和売薬同業組合をバックに大量の組合員が立候補して注目をあびた。その数は一〇〇人を突破し、「組合員の立候補みないところなし」と新聞に報じられた。先年の売薬印紙税廃止に絡む諸問題で、多数の同業組合委員が活動した結果、政治に関心をもつようになったという(「奈良新聞」、昭和四年五月四日付)。

売薬試験場の設立 一九二八年(昭和三)度に、高田町(現大和高田市のうち)の県立工業試験場内に売薬試験部が併設されることになった。大和売薬同業組合では、施設費、設備充実費の名目で一九二八、二九の両年度にわたって三〇〇〇〇円を寄付している(「奈良県薬業史」資料編、三。七〇、四七九、四八二頁)。従来売薬製造の指導研究の機関がなかっただけに、業界にとっ

ては画期的なことといえる。「優良処方」と「耐久力の研究」をまっ先に開始するとみられた。配置売薬であるから少なくとも三か年の完包を保つ必要があるといわれ、そのほかカビの問題、製造方法の研究、原料薬品の鑑定などが研究課題であった。ただ「研究に成功しても、一般業者はこれが成功にあたって特別に機械を購入することは経費等の関係から到底不可能であるから、同所が一般業者から委任を受け製造を引受け業者の試売を容易ならしめよとする」(奈良新聞、昭和四年五月二日付)とところに目的が置かれたようである。若干の増築・改造をして製薬試験室にあて、学理的試験と小規模の工業的試験を行うために製丸機ほか八台の製薬機械を設置して出発したという。一九三〇年(昭和五)一月には、県立工業試験場売薬部の試験報告などの結果を組合員に配付して製剤上の参考に供した。そして、同年四月から一般業者の求めに応じ売薬の調剤を開始した。料金は、売薬製形、調剤によって異なっているが、最低一〇〇匁につき三銭五厘〜二円迄だったという(奈良新聞、昭和五年四月二日付)。

売薬製造業者にとって、県立工業試験場に併設された売薬試験部の独立は一つの課題であり、その後、独立運動が展開された。そして、一九三一年一二月の通常奈良県会最終日に、奥村正信・仲川房次郎・松原利左衛門の三県会議員が建議案を提出し、満場一致で採択をみたのである。この県会に、大和売薬同業組合から提出されていた陳情書は、その理由をこう記している(昭和六年通常奈良県会会誌、昭和六年四月二九三〜二九五頁)。

今般県会議長宛、別紙之通り請願書並ニ陳情書提出致候ニ就テハ何卒御高配相賜リ度御願申上候

昭和六年十一月二十四日

大和売薬同業組合

組長 中嶋太兵衛

県会議長 都司 太右衛門殿

陳 情 書

県立工業試験場売薬部ヲ独立シテ県立売薬試験所ト被成下度、左ニ其理由ヲ具申シ茲ニ貴職ノ御明断相仰キ度、此段以連署謹而及陳情候也

理 由

多年要望セシ売薬試験所設立ノ義ハ、昭和三年四月県立工業試験場内ニ売薬部トシテ属置セラレ一部之カ実現セラレタル事ハ貴職始メ関係当局ニ対シ深ク感謝致ス次第ナリ、爾来全部ハ日ヲ追フテ相当ノ成績ヲ示シ斯業ニ裨益セラレツ、アリ、洵ニ本県産業上延テハ国民保健衛生上慶福ニ堪ヘルサル所ナリトス、然リト雖モ之カ施設ヲ要スルモノ甚ダ尠シトセス之ヲ想フニ現在ノ如ク工業試験場ニ隷属セル状態ニ於テハ到底之カ整備ヲ期シ難キモノト思料ス、如何トナレハ普通商工関係ノ指導研究ノ機関ニ配スルニ貴重ナル人体ノ衛生上ニ立脚セル特殊試験機関ヲ属セシムルハ、彼此ノ部門ノ性質ヲ異ニシ之カ発達ヲ阻害スルヤ大ナルモノアリト信ス、晩近医薬学ノ進歩ト其普及ニ伴ヒ、売薬ハ国民疾病ノ簡易治療上欠ク可カラサル家庭の必須品タルニ到レル、其使命重キニ鑑ミソノ寄属ヲ改メ之カ独立ヲ計リ、以テ独自ノ智識ト技能ヲシテ斯業ノ向上発達ニ資セラレンコトヲ希フ次第ナリトス

熟々本県斯業ノ現況見ルニソノ製産年額参千万円(定価額一引用者)ニ上リ米穀ト之カ双翼ヲナシテ本県重要物産ノ大宗タリ、其製造ヲ業トナスモノ一千余名ヲ下ラス之カ従業者数千名ニ及ヒ販売ニ携ハル行商人数万ニ達スルノ状態ニシテ、之カ間接或ハ直接県経済界ニ寄与スル所実ニ莫大ナルモノト云フヘシ、故ニ若シ一朝本産業ノ衰頽ヲ見シカ之レ影響甚大ニシテ実ニ寒心ニ堪ヘサルモノアリト信ス、近時富山、佐賀、滋賀等各県ニ於テハ官民俱ニ力ヲ協セテ其発達ヲ策シツ、アリ殊ニ之カ研究向上ノ基幹ヲナス売薬試験所ノ設置ニ付目下大イニ奔走中ニシテ、既ニ富山(既ニ富山県ニアリテハ組合ニ於テ充実セル本施設アリテ之カ経費)正ニ其実現ヲ見ントス、今ヤ財界不況ノ影響ハ斯業ニ相当ノ苦難ヲ来シツ、アリ、加之他府県売薬発展著シクシテ商事到ル処激甚ヲ加ヘ今ヤ我商城ニ迫ラレツ、アリ、此秋ニ際シ我大和売薬ハ須ク斯業将来ノ確立ヲ計リ其隆昌ヲ期スヘク製剤ノ改善ト其向上ヲ策シ、以テ優劣ナル他府県売薬ヲ凌駕スヘク一大躍進ヲ試ムヘキ時期ナリトス惟フニ遠ク神代ヨリ歴史的由緒深キ我大和ノ薬ヲシテ弥々ソノ向上発達

ニ資セラルヘク、速ニ全部ヲ独立セシメ其充実ヲ期シ以テ權威アル研究指導機関タラシメンコトヲ庶幾フ所以ナリ

翌年の県会にも同様の陳情をおこなっている。こうして、一九三四年（昭和九）四月奈良県立売薬試験場として独立する。その規則および手数料徴収についての規程は、つぎのとおりである（〔奈良県報〕一二七七号、号外、昭和九年三月三十一日付。〕）。

奈良県立売薬試験場規則

第一条 売薬試験場ニ於テ行フ業務ノ概目左ノ如シ

一 原料、材料及製剤ニ関スル試験研究、分析、鑑定及調査

二 機械器具ノ鑑定

三 質疑応答

四 参考品ノ配布

五 意匠図案ノ調製

六 其ノ他売薬ノ改良発達ヲ図ルニ必要ナル事項

第二条 売薬試験場ハ前条ノ規定ニ依ル業務ニ妨ナキ限り営業者ノ委託ニ応シ加工又ハ製剤ヲ為スコトヲ得

第三条 売薬試験場ニ左ノ職員ヲ置ク

場 長

地方商工技師

商工主事補

商工技手

場長ハ地方商工技師ヲ以テ之ニ充ツ

第5章 恐慌から戦時下への大和売薬

奈良県立売薬試験場手数料徴収条例

第一条 県立売薬試験場ニ於テ依頼ニ依リ売薬ノ整形加工又ハ封緘並証印ヲ為シタル

トキハ本条例ニ依リ手数料ヲ徴収ス

第二条 手数料ハ左ノ範囲内ニ於テ売薬試験場長之ヲ定ム

一 売薬ノ整形加工一疋ニ付金十銭以上金六円以下

一 売薬ノ封印並証印百円ニ付金一銭以上金一元以下

但シ百個ニ滿タサル端数ハ百個トシテ手数料ヲ徴収ス

第三条 手数料ハ依頼品交付ノ際之ヲ徴収ス

付 則

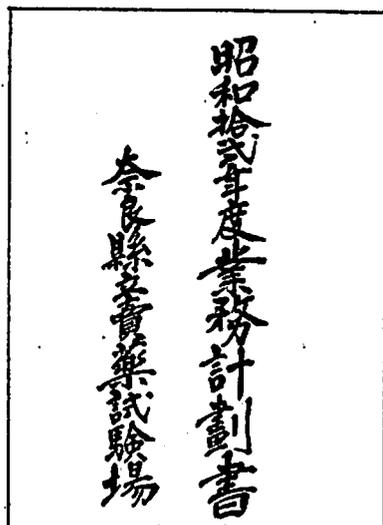
本条例ハ昭和九年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

売薬試験場の設置と同時に、右の規則類が設定されたわけであり、同試験場独立の意義は大きいものがある。売薬関係者からの質疑応答あるいは整形加工などで利用された。独立してまもない一九三六年度の同試験場の研究テーマは、(一)配合禁忌の研究、(二)糖衣掛方法の研究、(三)売薬の耐寒試験、(四)婦人薬の研究であり、前年度からの継続のものが少なくなかった(奈良県立売薬試験場業務功報)。同年度の利用状況をみると、表6のとおり、質疑応答件数が圧倒的に多く、二六〇件を数える。依頼試験および鑑定は五二件、そのほか売薬試験場主導による見本品の配布、実地指導および講習講和も目立つ。なお表にはないが、同年

表6 奈良県立売薬試験場の業務成績(1936年度)

摘 要	件 数	内 訳
試験および鑑定	52 ^件	売薬原料品の鑑定2, 売薬製造試験50
質疑応答	260	売薬処方の研究101, 売薬原料関係53, 売薬製造法関係23, 薬事法規関係22, 売薬の効能関係13, その他48
実地指導および講習講和	40	実地指導22, 売薬の能書指導9, 講演7, その他2
見本品の配布	66	丸剤21, クリーム剤16, 錠剤9, その他20

注 『奈良県立売薬試験場業務功報』28~30頁から作成



奈良県立売薬試験場の
業務計画書

度の整形加工の依頼件数は五五、数量は七二万七四四一瓦、手数料は三三九円八銭であった(同上)。

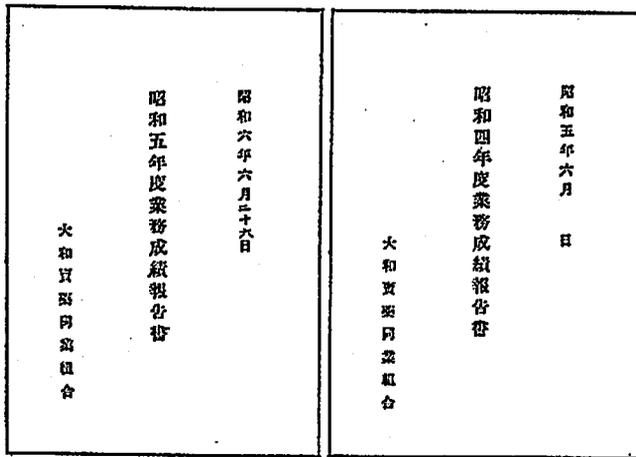
さらに翌年度の計画では、試験研究事項として、(一)配合禁忌の研究(予算一〇〇円)、(二)消化薬等に関する研究(同一五〇円)、(三)糖衣掛方法の研究(同一五〇円)、(四)清涼剤の研究(同八〇円)、(五)紫蘇葉成分の利用研究(同一二〇円)、(六)売薬の耐寒試験(同一〇〇円)があげられる(奈良県立売薬試験場)

和拾年度業務計画書』。
奈良県立奈良図書館蔵。

博覧会など 大和と同様、配置売薬である富山売薬では、世の不況のなかで売薬の販売が停滞したのに対し、そのへの出品の打開策として宣伝・広告が新しい手段として登場してきたという(富山県薬業史「通」六七一頁以下)。業界では、売

薬展覧会や実演会を開き、富山売薬の宣伝・広告を活発化し、業績の発展拡大につとめたというが、基本的には大和売薬も同様であろう。つぎに、『大和売薬同業組合業務成績報告書各年版』から、天覧品、博覧会などへの出品状況をみておこう。たとえば一九二八年(昭和三)の御大典に際し、天覧の榮に浴した売薬および製剤者は三三を数えた(奈良県薬業史「資料」編、四八〇、四八一頁)。

一九二九年(昭和四)には、いまの大韓民国の京城で開催の朝鮮博覧会に製剤一二〇点を出品し、家庭的な大和売薬の宣伝につとめており、さらに広島市主催の昭和博覧会を機に輸出売薬奨励の趣旨により輸取向売薬を出品している。おなじように伊勢の御遷宮奉祝神都博覧会に売薬一〇七点を出品した。一九三〇年(昭和五)には、同様に神戸市で開催の観艦式記念博覧会に多数出品し、神戸商工会議所内重要輸出品陳列所にも組合製剤を多数出品し、その振興を



大和売薬同業組合の業務成績報告書

意図したのである。また奈良県主催のもとに県商品陳列所で開催の国産品輸入品対比展覧会でも製剤多数を出品し、国産大和売薬の宣伝につとめた。一九三一年（昭和六）には、富山県商工課ならびに同県売薬同業組合主催の売薬展覧会が開かれたが、大和売薬からは十数人の出品があった。北海道拓殖博覧会への出品も同様であった。いずれも経費は出品者の負担とされたようである。

この間、小学校などへ教育資料として大和売薬を寄贈したこともある。一九三一年（昭和六）の東北地方の凶作にあたっては、同地方へ売薬を寄贈している。同様に、一九三二年の陸軍特別大演習のとき、慰労のため護衛警官・新聞記者らへ清凉剤を寄贈した。さらに一九三三年の三陸地方の震災地へも、多数の売薬を寄贈している。

大和売薬の海外販路拡大 大和売薬が不況に対応するためには、いくつかの改善を要する課題があったわけである。富山売薬では、一九二八年から

一九二九年にかけて、売薬荷物鉄道運賃の引き下げ、同小包郵便料金の負担軽減についての陳情をおこなっている。後者は、第九回全国売薬業団体連合会大会で可決された事項でもある（『富山県薬業史』通史六八九～六九〇頁）。

他方、大和売薬では不況からの脱出策として積極的に海外販路の拡大にも乗り出した。大和売薬は、明治末期に生産者の組織化を確立し、第一次世界大戦の好況期に東南アジアからハワイまで広い販路を確保して発展の機運をみせたが、『奈良県統計書』から輸出売薬のデータを得られるのは一九一一年から一九二一年までである。同書によると、輸出の大部分は南葛城郡の業者であり、

輸出額は一九一一年三万二〇〇〇円、一九一五年四万四〇〇〇円、一九一九年九万五〇〇〇円と増大している。一九二二年は戦後の不況で一万一〇〇〇〇円に低落した。その間の営業者数、行商者数の総統計は、一九一一年一六人（営業一三、行商三）、一九一五年一四人（営業六、行商八）、一九一九年八三人（営業五、行商七八）であった。大正期における売薬輸出は、量的にみるべきものがないが、大和売薬同業組合でも市況調査を開始していた。

配置売薬業者は、国内の販路がほぼ同一であったため、得意先で同士討ち競争の弊害に陥りやすかった。しかも掛代金の回収が困難となり、資金的にも行き詰まる状態であった。こうしたなかで、遠く販路を中米や南米に求め調査に乗り出す業者があらわれたのである。一九二八年末には、「大和売薬の販路をメキシコに開拓」と新聞に報じられた。東洋売薬株式会社がメキシコに社員を派遣して新販路を開拓しようとしたのである。同社は、翌年四月県内で最初に同地方の拡張を行ったという（『大阪朝日新聞』大和版、昭和三年二月二十九日付、前掲『昭和四年度業務成績報告書』）。さらに同年五月には、北アメリカにまで大和売薬は進出を意図することになる。東西アジアへの輸出が低率だったからであり、新聞はこう報じた（『奈良新聞』、昭和四年五月五日付）。

大和売薬は万金丹の富山には及ばないけれど、今や売薬王国の牙城に迫るものがあるが、このうち満州、朝鮮、樺太、台湾等に約一割を捌くのみで大和売薬の海外発展は頗る微々として振るはないので、業者はさきにメキシコに販路拡張の視察員三名を派遣したが、こんど更に北米に新販路を開拓すべく、……四名を半永久的に派遣し近く出発の予定だが、同人等は本年中販路の視察を遂げる筈で来年より大々的に出荷することにならう

大和売薬同業組合のデータによると、一九三一年（昭和六）度の輸向製造高は九万二〇〇〇円であった（前掲『昭和六年度業務成績報告書』）。海外売薬については、改めて後述することにした。